

私は昭和二十五年九月一日付で、同志社本部会計課勤務の辞令をいただき、この三月三十一日付で定年退職いたしました。

私の同志社での生活は、二十七年七カ月となります。しかし入社以来今日まで、何の業績もありませんでしたが、これという事故もなく無事に過ごさせていただきましたことは、同志社の先生・職員の皆様の、ご親切なる指導とご支援のおかげであつたと、ありがたく厚く御礼申しあげます。

私の入社当初より定年退職になるまでの職場は、ほとんど総務部の経理・学費・出納関係でした。

二十七年余りの同志社での生活は、決して順調なる日々ばかりではありませんでした。

昭和三十一年の事務機構改革のとき、また人事異動のあつたときには、仕事の重荷と精神的な疲労で心が不安定な状態になり、夜も寝苦しいこともありました。

経理課におりましたときは予算編成のため、学費係では新入生の入学学費未納者の名簿作成のためなどで、夜の十二時、一時に

帰宅した日もしばしばありました。

しかし、今になって考えてみれば、皆様のご援助のおかげで乗り越えられたことと感謝の心でいっぱいです。

私の同志社での努力の目標の一つは、勤続二十五年を健康で迎えたい、という願ひでした。幸運にも私の勤務二十五年目の年は、同志社創立百周年記念にあたる年で

同志社を去りて

小室憲蔵

した。

昭和五十年十一月二十九日、国立京都国際会館の大会場において盛大に同志社創立百周年記念式ならびに総長就任式典が催されました。式典の始まる前に休憩所で、当時は文学部事務室に勤務しておりました関係で、木村文学部長と、前年一年間勤務しておりました宗教部の遠藤部長の二人の

先生より、「小室さん、永年勤務表彰おめでとうございます。」と、お言葉をいただきましたときは、ほんとうに感激いたしました。

定年前の四年間は、後進のかたに道をひらく意味で閑職につきましたが、私としては最後のご奉公と思って、少しでも同志社のためにお役にたつことができれば、と微力ながら努力をいたしました。

学校を卒業し、社会生活の大半を過ごしました同志社での先生・職員の皆様のご厚意は、私の生涯の思い出として大切にしたいと思っております。

なお、去る三月三十一日に、定年退職者のため、学校が京都ホテルで慰労会をひらいてくださいました。

その時、上野直蔵総長から「清心者福矣」と書いた色紙をいただきました。

私は、この言葉をかみしめて今後生きてゆきたいと思っております。

(元大学総務部職員)

戦後、再び私が同志社にお世話になってから、早いもので三十二年経った。

まさか停年退職しようとは思ってもみなかったけれど、四人兄妹の一番末に生まれながら、私は家庭の事情でどうしても老母からはなれることができなかった。そうするとどうしても京都か、または関西におらねばならない。いくたびか同志社からはなれようとしながら、今までのめめとお世話になっていたわけである。しかし、まんざらのんべんだらりとしていたわけではない。

研究室の事務をとるにはどうしても大学卒の資格が必要だと言われて、三十歳半ばから立命館大学の二部に入學し、おりあしく研究室の移転を四度もしながら経済学士の資格も、もったし、続いて大学院へも進み修士の資格もとれた。組合の執行委員から三役もさせてもらった。しかし、皆様とともにいかに私が努力してきたにしても、ここ二、三年の同志社の傾向は、いやおうなしに右旋回しているように思えてならない。

戦争初期のころ、図書館を視察に来る人

同志社を去りて

の目に「資本論」という書名をふれさせまいと苦心した日から、敗戦後の資本論と名のつく本は購入と同時に取り合いになった日もあった。そして私の同志社における最後の目、あいさつにあわただしくまわったさきざきで私が見たのは、その昔、私の下で働いていて、しなくてもいいことばかりしていた人たちが、若くて係長についてい

野村敏子

るのである。男であるというだけで。

果たしてこれで同志社の進路が明るく拓けるものなのだろうか？否である。

憲法に男女同等であることは唱われていても、この差別は誰がつけるものなのだろうか！日本の進路は、日本人の一人、一人が責任を持って押し進めてゆかねばならない。それを、このようなゆがめられた形で

行ったら、どうなるのだろうか！私は明らかに戦争前夜の空気を感じているのだ。おそろしいことだ。戦争がいかに悲惨であるか、飢えがいかにいたましいか、経験した私は知っている。しかし、戦争のこわさを知らない今の若い人たちに飢えの実感がわかつたはずがない。その故にこそ、今の平和憲法は、どうしてもまもらねばならないのだ！何のためにあれだけの人の命を失い、血を流して私たちが得ることができた憲法ではなかったか！

戦争を対岸の火事のように思っているなら大間違いである。

繰り返し、歴史書を読んでほしい。そして戦争の恐ろしさを早く知ってほしい。そして今、何をなすべきかを考えてほしい。

そして実行してほしい。これだけが、私の同志社を去るにあたって、これからも同志社におられるかたがたへの、ただ一つの提言である。

(元大学商学部事務室職員)

彰栄館の建築について

前 久 夫

彰栄館は同志社における最も古い煉瓦造りの建物であるばかりでなく、京都市内において現存する最古の煉瓦建築でもある。^{注1}今日からみれば、特に目を見張るような華やかな建物ではないが、当時の人びとの目には、想像するのにも、まさに文明開化の象徴のように映ったに違いない。

この建物については、かねてからたびたび紹介されてはきている。^{注2}また、建築史学の立場から学術的にとり上げられたものもある。^{注3}しかし創建以来、学校の教室として使用されてきた（現在も中学校校舎）ため、その建物の調査が容易に行われがたかった。もちろん大

規模な改造の行われた記録も形跡もない。さらに残念なことは、当時の工事中の図面その他の資料も、今のところ未発見である。

ところが衆知のように、昨年十一月以降、大規模な修理工事が行われている。これは、時代の変化とともに、それに即応するために校舎機能の変革をせまられたのと、加えて老朽化に対する修復のためと考えられる。工事は、記念的建造物であることもあって、慎重に進められており、現在も続行中である。

この彰栄館の設計者とされているアメリカ人宣教師D・C・グリーンについて、建築史学の立場から興味をもち考察をつづけている

筆者は、同志社当局のご好意で工事中における調査の機会を与えられた。

この小稿は、この調査中に得た知見を、同志社大学（人文研）教授杉井六郎氏のお薦めによって草したものである。もとより、建物調査も、グリーンに関する文献的研究も、今なお続行中であるので、これらの関係と、紙面の制約もあり、これは建物調査の概報であることをお断りしておく。

注 1

彰栄館にさき立つ京都市内の煉瓦造り建築には、明治十年（一八七七）竣工の京都駅駅舎がある。大正二年（一九一三）取り壊された。

注 2

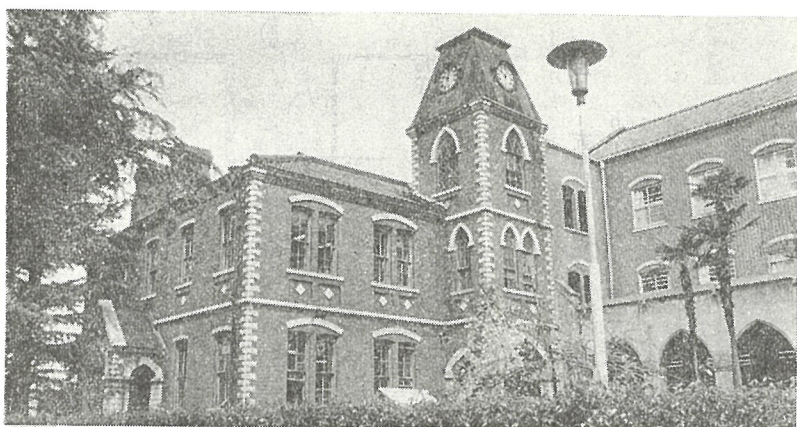
同志社総務課「同志社の建物を見る手引」（騰写刷）昭三十、これは田中良一氏の執筆で、のちに「同志社の明治建築案内」（騰写刷）昭三十八として改訂され、さらに『同志社九十年小史』昭四十に再録されている。

拙稿「同志社」失われゆくゴシックの美しさ」都新聞 昭三十・八・三十一付

坂本勝比古「同志社の明治建築」

新住宅 昭四十六・六月号

拙稿「明治初期の洋風建築——同志



同志社彰栄館

社の建物」 嵯峨 昭五十・六月号

注3

近藤豊「同志社の煉瓦造校舎」『明治初期の擬洋風建築の研究』（学位論文・私家版）昭三十六 所収

この建物は烏丸通りの西門を入ったすぐ北に位置している。「元来東が正面であった。」^{注1}といわれるように、その外観からも内部の間取りからも、かように考えられる。もっとも、南側入口の破風には「彰栄館」と彫られた標石がはめこまれている。しかしこれは、東に礼拝堂、理化学館と並ぶ、構内のメイン・ストリートに面しているため、つけられたものであろう。ところが、その正面玄関が、昭和二十六年に増築された、いわゆる新彰栄館のために、外観のみではあるが、時計塔兼鐘塔より北が原形を失ってしまったのは惜しまれる。

この建物の建築計画および工事期間等については、たびたび述べられてきたことでもあるが、今回新しく知り得たことも含めていちおうふれておこう。

計画は明治十五年（一八八二）ごろから始まっていたようである。^{注2}しかし、それが具体化したのは翌十六年の五月中旬のことである。この学校における最初の「永久的な建物」、

「煉瓦と石の建物」を建設しようというので関係者は大変な意気込みであった。^{注3}資金については米国外伝道協会 American Board of Commissioners for Foreign Missions から七千五百円の寄付を受けることで出発し、同協会からわが国に初めて派遣されてきていた宣教師グリーン Daniel Crosby Greene（一八四二—一九二三）を中心に設計が進められた。工事入札が十月十七日グリーン宅で行われ、上京第三十一組清水町の尾滝菊太郎に落札、工事は棟梁小島佐兵衛の手で十一月上旬開始、十二月二十一日に定礎式を行い、竣工が翌十七年（一八八四）九月で、同月十五日に開場式を挙げている。

注1 近藤豊 前掲書

注2 一八八二年十月十三日付、グリーンよりアメリカン・ボード本部のN.G.クラークにあてた書簡（ハーヴ・アード大学ホートン・ライブラリー蔵）

注3 E. B. Greene "A New-Englander in Japan Daniel Crosby Greene"

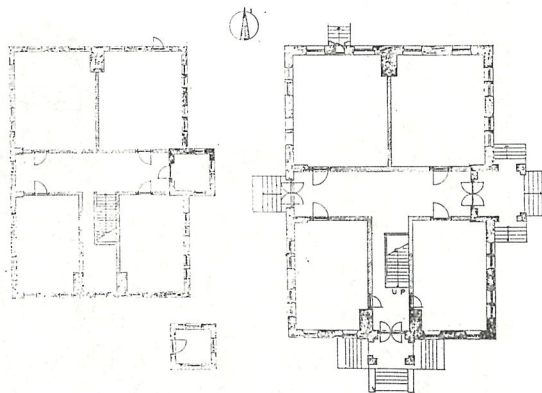
Boston 1897

新島襄「同志社記事」同志社史料集 報第一集 昭三十八

同志社「新島襄先生詳年譜」昭三十四

注4

近藤豊「前掲書」には「辰瀬」とあり、『同志社一〇〇年の歩み』昭五十には「長瀬」とある。いずれかに確定する資料を持たないが、おそらくこれらの諸説が出たのは、いずれもその草書体が酷似しているためと思われる。「尾瀬」は、前記「同志社記事」によった。



彰栄館復原平面図 (右1F, 左2F)

注5

確認する資料はないが、彰栄館の小屋組みの母屋桁に「小島」の焼印が押されており、この建物より七年後に始められたハリス理化学館の棟札に、「小島佐兵衛」、「小島鎮太郎」の名が見られるところから、その可能性はじゅうぶん考えられよう。

この建物は桁行南北六十三・八五尺(十九・三五メートル)、梁間東西四十五・〇〇尺(十三・六五メートル)——いずれも煉瓦壁真裏、建坪八十三・四六坪(二七八・四平方メートル)、延坪一七一・八一坪(五六六・八〇平方メートル)、煉瓦造り二階建て、塔屋付屋根寄棟造り棧瓦葺である。外観の洋風にもかかわらず小屋組みと内部間仕切り壁は、すべて和風であり、したがって木造である。煉瓦は長手七・六―七・七、小口三・六―三・七、厚さ一・八一―一・九(いずれも寸法は寸)のものをを用い、目地幅〇・二五寸で漆喰モルタルで接合している。積み方は、長手と小口とを段ごとに交える、いわゆるイギリス積みであるが、長手四段ごとに小口一段を挟んでいるのが、この建物の特色である。外壁の厚さは一階で一・六尺(四十八・五センチ)、二階で一・二尺(三十六・五センチ)ある。この外壁の上

部に軒桁を回し、これに梁を掛けている。したがって小屋組みは、さきにも述べたように全く純粹の和小屋になっている。そればかりではなく、その小屋束には墨書の番付が記してあるなど、わが国の大工がその構造を計画し、施工したことを物語っている。

平面は階上、階下とも中廊下をはさんで左右に東西それぞれ二部屋を設け、つごう上下八つの部屋から成る。

これらの内部の間仕切りは、さきにも述べたように、純粹の和風大壁で、径八分ほどの丸竹を間渡しに通し、小舞竹には一・二―一・五寸径の丸竹二つ割を用い、藁縄で編んでいる。外部に面する周壁は、七段ごとに二寸角の横木をはめ込み、これに壁下地を留めている。

階段の西側つまり二階踊り場の西側間仕切り壁について注目される改造がある。今回の修理工事にもなう解体で判明したことであるが、この間仕切り壁は、もと、さらに西に一・二メートルほど寄っていた。理由は、まず現在の間仕切り壁の柱が間柱も含めて、すべて床板の上に直接立てられていること。もとの間仕切り壁の南北端の柱に間渡穴や櫓

を入れた^か隙き込みがあること。現在の間仕切り壁の間柱が、すべて転用材であること。それといま一つ注目すべきことは、この最初の柱を抜くために小屋組みの中に梓^すり^りの^は^は木^はをわたしていることである。この^は木^はが^はち^はょう^はう^はど、柱を抜いたところを^はね^はり^は上^はげ^はして^はいることは、この補強工作が、間仕切り壁を撤去することに^はあ^はつ^はた^はことを証している。ところ^はでその時期であるが、このような大材を屋根裏に上げて細工することは、かなり困難をと^はも^はな^はう。また階段^はわ^はきの^は羽^は目^は板^はが^は当^は初^はの^はもの^はと^はさ^はほ^はど^は新^は旧^はが^はない^はこと、な^はど^はか^はら^はあ^はる^はいは^は当^は初^はの^は工^は事^は中^はに、急^はぎ^はよ^は変^は更^はさ^はれた^はので^はな^はか^はら^はう^はか。

窓は、現在上下階とも西側全部と南側の一部が鉄製に取り替えられているほかは、すべて当初の木製上げ下げ窓で、分銅吊りになっている。ただし塔屋の窓は分銅がなく、上げて栓止めするようになっている。

壁および天井は白色漆喰仕上げで、天井回りには簡単な線型がつけられている。

屋根は日本瓦の棧瓦葺きで、隅棟に起(て)りをもっているのも、日本の民家の屋根を思わせる。また、当初の写真に見られるよう

に、もとはこの屋根の輪部が漆喰で白く形どられていた。これなども、アメリカ本土の民家の影響というより、むしろ、わが国の土蔵的といえよう。基礎、隅石および窓回りなど要所には花崗岩を用い、壁体にアクセントをつけている。ことに時計塔の窓は尖りアーチの花崗岩を^はめ^はり^は入^はして^はいる。また基礎東南隅石の一つに「明治十六年」(右書き)「A. D. 1883」と彫られているのは衆知のところである。

この建物の設計者と目されているD・C・グリーンは、ほんらい宣教師であつて建築家ではない。彼が、どの程度この建物の設計にかかわったかについては、いま検討を進めている段階なので、別稿に譲るほかはない。しかし、少なくとも建物の全体計画、細部にわたる意匠計画が彼の手になったことは確かである。構造計画については、わが国の棟梁(小島、尾瀧たち)の協力が求められた、というより、彼らがイニシアティブをとったのではないだろうか。

この建物の建築様式は、かつて武田五一博士が「アメリカン・ゴシック」^{注1}と名づけた様式である。ゴシックの特徴である尖りアーチやリブ・ヴォールトなどが、多少アメリカ

カナイズされて用いられているという意味なのであろうか。しかし、リブ・ヴォールトによって空間を広くするということが、ここでは和小屋形式によらざるを得なかった。(グリーンも、わが国の棟梁たちも、洋小屋の構築法を採用しきれなかった。)したがって、逆に空間が極度に分割化されざるを得なかったのである。同じくグリーンの設計とされている、彰栄館よりわずか二年後に竣工した礼拝堂が、ゴシックの構築法を採用しているのは注目すべきことだが、この進展がどのように説明されるのか、今後の課題にしておく。

注1 武田五一「同志社の建築について」

『我等の同志社』昭十 所収

最後に、この調査に便宜を与えて下さった同志社当局、わけでも前述の杉井教授および中村正一氏(中学校)に厚くお礼を申し上げたい。また、高著を通じてのみならず、親しくご教示をいただいた近藤豊博士とグリーン書簡の解説や建物の実測まで協力を惜しまれなかった村形明子(当時京博在勤、現在京大助教授)の両氏にも、改めて深く謝意を表したい。

(建築家・建築史家)

南米カラカス

日本人学校での教師生活



湯 浅 博

カラカス日本人学校
開校当時（1975年12月）の全校写真。
児童・生徒総数 41名。

今日もまた七時十五分に、スクール・バスがアパートの前まで迎えに来ている。「ブエノス・ディアス」とあいさつをしてバスにのると、すでに数人の生徒がのっていた。その後また別のアパートにいる生徒を迎えに行く。あらかじめ何時にどこという時刻表が配っており、全部生徒を集め終わると、アウト・ピスタ（自動車専用路）に出て、郊外にある学校へ急ぐ。途中見晴らしの良いところでふりかえると、アンデス山脈の支脈アピラ山地中のカラカスの谷は、すっぱりとスモッグにおおわれているのがわかる。三十分も走ると学校に着く。ここはバジー・フレスコ（涼しい谷）といわれるだけに、朝は少し寒いくらいで、セーターが必要などである。授業は二時二十五分に終わり、またスクール・バスでカラカスまで帰る。土曜・日曜と休みであるので、金曜は、皆、週末のプランを話し合ったりして、少しにぎやかになる。

カラカス日本人学校の設立の経緯

周知のように、ベネズエラは世界でも有数の石油産出国で、南米の北端のカリブ海に面したところにある。南米というブラジル、アルゼンチン、ペルーなどが、今までの日本人の進出の中心であったが、ここ十年ほどは、日本の商社・銀行も、これら大國から、「南米の星」ベネズエラ（外国人の稼ぎ場）へと事務所を移すようになり、その数は、現在六十数社にのぼっている。駐在の形式も、単なる市場調査から長期化するにつれ、家族の同伴が多くなり、その子女の教育が問題となってきた。いずれは、日本に帰るといふ子供たちにとっては、週一回、毎土曜だけの補習授

業校（国語だけを教える学校）だけでは不安で、ついに在留邦人の数が、千人になった時点ころより、全日制日本人学校の設立が強く望まれるようになり、約二年の準備期間を経て、一九七五年十月十五日仮開校し、同年十一月一日には正式開校された。当時間題になったことは、校地の選定と教員の確保の二つであった。

「校庭をもった学校」ということで、あちこち捜されたが、当地の学校は、一般的には運動場をもたないのが普通なものと、カラカス市内では、土地が高いので、予想外に入手難であった。現在の場所は、以前スポーツ・クラブとして利用されていて、市内から遠いということや、周囲の環境が南米にはどこにでもあるランチョ（食しい人々の住む小さい家）であるということで、治安上のことが心配されたが、賛否両論ある中で決定された。つぎに教員は、外務省に五名の派遣を要求されたが、九月開校ということもあり、困難をきわめ、二名しか認められなかった。幸いに現地に教員免許状をもつ婦人が数名おられたので、当初は、政府派遣教員二名。（内一名は、長年補習授業校をやっておられた先生で、日本から行ったのは、私一人であった。）現地採用教員八名の計十名でスタートし、校長は在ベネズエラ日本大使館の大使であった。児童・生徒数は約四十名。スクール・バスは四台、事務員一人（ベネズエラ）、校舎管理人一人（チリー人）という陣容で、PTA、理事会との会合もしばしばあり、皆、新しい学校を創るのだ、という意欲に燃えていた。

日本人学校とは

海外にある日本人子女の教育機関としては、全日制日本人学校と補習授業校の二つがある。前者は、現在約六十校あり、その大部分は、商社・企業・銀行・在留邦人などから寄付を集めて設置し、教員の派遣とその手当は外務省、教科書は文部省より送られ、現地での扱いは、大使館の付属となっている。しかし、現地採用教員や職員の人件費、教材の購入などは受益者負担となるので、総体に月謝は高く、カラカスの場合で、月額三万円を越えていた。財政面は、各商社・銀行等の代表者より構成される理事会が担当するので、その形態は私立学校といつてよい。どこも小・中併設で、高校はない。ここに大きな問題がある。

後者は、約七十校あり、発生的には、全日制の場合と似ているが、週一回（土曜日の午前中）しかなく、授業も国語だけというところが多い。全日制の学校をつくるに至らない児童・生徒数しかない地域や、北アメリカ、ヨーロッパなど、いわゆる先進国に多い。政府より援助があるが、全日制の学校ができると打ち切られるので、通常は、補習授業校は、全日制に発展的解消または吸収される場合が多い。次の表一をみていただきたい。アジアでは、昭和五十年までに、ほとんどの国に全日制日本人学校ができているが、北米には長い間それがなく、昭和五十年にニューヨークに、本年シカゴにできるという状態である。その反対に、補習授業校は、アジアに七校、北米に二十三校もある。ヨーロッパも昭和五十二年までは、全日制八校に対して、補習授業校二十四校もある。このことからわかるように、海外に出た日本人にとつて、北米やヨーロッパに行った人々は、その子女を現地の学校に

表-1 全日制日本人学校の地域別・年代別推移

地域	年代	昭和30年代	40 ～ 44 年	45 ～ 49 年	50 年	51 年	52 年	53 年	計
アジア		3	9	3	3	1	1	0	20
北米		0	0	0	1	0	0	1	2
中南米		0	4	3	1	1	2	0	11
ヨーロッパ		0	1	5	0	2	0	4	12
大洋州		0	1	0	0	0	0	1	2
中近東		0	2	2	2	0	1	1	8
アフリカ		0	1	3	0	0	1	0	5
計 (累計)		3	18 (21)	16 (37)	7 (44)	4 (48)	5 (53)	7 (60)	60

参考資料：昭和52年度海外子女教育施設便覧の付表より作成

通学させ、週一回だけ、日本語の勉強のために補習授業校に行かせるというケースが多く、アジアに行った人々は、その子女をあまり現地校に通学させたがらず、早くから全日制の学校づくり熱心であった、といえる。その結果、『海外子女教育』という雑誌の子供たちの感想のところにしてみると、北米、ヨーロッパに行った子供たちは、比較的現地生活にとけこみ、現地人の友人も多く、現地語も上手である。アジアから帰ってきた子供たちは、その国のことを聞いてもあまり知らない子や、ましてや現地語をマスターした子となると非常に少ない。親はともかく、子供は、そのことが非常に残念だ、といっている者もいる。

中南米では、全日制のできる前に、現地校やアメリカン・スクールに在学していた子供が高学年にいる場合が多く、彼らにとっては、思考や表現が、日本語よりスペイン語、英語でなされていた場合が多かったが、現在は、同学年に日本の学校より直接来た子供もいるので、その影響は大きく、日本語は急速に上達し、スペイン語、英語の力が落ちてしまう。我々からみると残念なことと思う。

全日制日本人学校の教員は、各都道府県教育委員会を通して応募してきた者を、文部省が試験（筆記と面接。主として過去の実績調査と、日本人学校教員としてのビジョンについて文章でかく。）をして選考し、外務省に推薦するという形をとっている。そして誰がどこに行くか、というあっせんは、海外子女教育財団というところがある。もちろん、行き先については希望が聞かれるが、ニューヨーク、パリ、シドニーなどに希望が集中してしまうので、財団が、わりふりの交渉をする。私立学校の教員の場合は、所属長の承諾を得て、文部省に直接応募するという形になる。海外にいる間の国内での身分、待遇は、国・公立の場合は、研修出張になり、給与は支給される。私立の場合は、所属長の理解の程度により千差万別である。私の場合は、休職になり、給与が出なかった。国・公・私のような差をなくし、有能な教員を集める方策として、三木首相の時代に、「派遣教員の身分を国家公務員とし、国内給与は、国が払う。」ということが提唱されたが、福田首相の時代になって、それは、あまり進展していない。なお、派遣教員が海外にいるときにもらう金は、給与ではなくて、在外手

表-2 児童・生徒数（昭和52年7月現在）

区分	小学部							中学部				合計
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	計	
男	11	3	9	9	7	4	43	4	1	0	5	48
女	7	8	2	8	1	1	27	3	1	1	5	32
計	18	11	11	17	8	5	70	7	2	1	10	80

出典：昭和52年度 海外子女教育施設便覧

備考：中1までは、各学年で1学級、中2・中3は2学年で1学級

表-3 週あたり授業時数

学年	教科	国語	社会	算（数学） 数	理科	図（美術） 工	音楽	家庭 （技家）	体育 （保・体）	道徳	特活	英語	スペイン語	計
小学部	1	8	2	5	2	2	2		2	1	2		2	28
	2	8	2	5	3	2	2		2	1	1		2	28
	3	8	2	5	3	2	2		2	1	1		2	28
	4	8	3	5	3	2	2		2	1	1		1	28
	5	7	3	6	3	2	2		2	1	1		1	28
	6	7	3	6	3	2	2		2	1	1		1	28
中学部	1	5	4	5	4		1		2	1	1	5		28
	2	5	4	5	4		1		2	1	1	5		28
	3	5	4	5	4		1		2	1	1	5		28

出典：昭和52年度 海外子女教育施設便覧

当であり、なにかの事情で夫婦が外地と日本に別れた場合、配偶者手当は出ない。

カラカス日本人学校紹介

児童・生徒数は、開校当時は約四十名、昭和五十一年一月には、スペイン系、イギリス系の学校にいていた者の転入があり五十名、五十一年四月から五十二年三月までは、六十名から七十名の間を前後し、五十二年七月には八十名、五十三年四月には百名を越えたと聞く。低学年が多いこと、年間転入生が約三十名、転出生が約二十名と、児童・生徒の移動がはげしい。（表1-2参考）

教職員は、五十一年三月までは、派遣教員二名、講師八名、スクール・バス運転手四名、事務員一名、校舎管理人一人であった。五十一年四月には五名、五十二年四月には一名の派遣教員が赴任し、五十三年三月に二名が帰り、四月に三名が来たので、現在九名である。講師は漸減し、五十三年三月では六名（内二名はスペイン語の講師のベネズエラ人であった。運転手は、バスが六台になったので六名である。

授業については、表1-3をみていただくとわかりますが、当初は、国語、算数の時間が多く、スペイン語はなかった。社会、理科は現地に教材を求めた授業をした。図工、家庭は材料や道具の調達に苦労した。道徳は、毎週月曜の校長の話で代えた。特活は、一年・二年は学級会、三年以上をクラブ活動とし、当初は、週二時間あり、野球、卓球、テニス、器械体操、手芸、絵画、ス



アピラ山地 (2,000m) よりカラカスを望む。
人口約 300万人。20階建ての高層ビルが林立。

ペイン語、新聞、観察などがあつた。

開校以来行った行事を列挙してみると、昭和五十年十二月クリスマス会、五十一年五月国立公園ラガルティールへ遠足、六月学校訪問（リセオ・ミリタリサイド）、九月電池工場見学、十月第一回運動会、十一月創立一周年記念式典、十二月クリスマス大会、五

十二年一月もちつき大会、コーヒー園見学、二月ひなまつり学習発表会、三月日本産業見本市見学、五月球技大会、遠足（昔、使われていた汽車にのった。六月国立アヤクチヨ幼年学校訪問、九月工場見学（ペプシ、紡績工場）、十月運動会、十一月写生大会、十二月クリスマス会、五十三年一月もちつき大会、二月学習発表会等々になる。

私的には、生徒の有志を集めて、アピラ登山、野球、サッカー見学、国会議事堂、市役所、図書館、新聞社、博物館などへ行つた。

おわりに

私は、「カラカス日本人学校のレールをひいてくれ、という外務省の言葉に魅力を感じて、派遣教員第一号として、昭和五十年十一月十二日にカラカスに行つたわけですが、小学生を教えるという体験もでき、学校の体制づくりや行事について、当地の日本人社会は、非常に理解があり協力的であつた。私に対する期待も大きかったので、早くスペイン語を上達して、現地社会を理解しようとした。毎日毎日がとても充実していて、「自分がいなければ、学校はどうなるか」という気負いがあつた。そして、昭和五十三年四月一日に任期を終え、帰国した。

学校の仕事以外に、スペイン語学校で多くの友人ができたこと、登山クラブに入りあちこちいったこと、中南米諸国を旅行できたこと等々は、貴重な経験であつた。

（香里中・高教諭・地理）